

平成19年度

子どもにとってよい支援をつなぐために
～通常の学級でできる指導・支援事例集～



目 次

I はじめに	1
II 【小学校の実践】	
・罫線がない枠に字を書くのが苦手な子どもには？	2
・他のことに注意が移り、作業が進まない子どもには？	4
・友だちの顔と名前が覚えられない子どもには？	6
・片づけの苦手な子どもには？	8
・忘れ物の多い子どもには？	10
・板書をノートに写すのが苦手な子どもには？	12
・学習に集中しにくい子どもには？	14
・算数が苦手な子どもには？	16
・自分の感情が抑えられない子どもには？	18
・読むこと・書くことが苦手な子どもには？	20
・遊びのルールが守れず、友だちとトラブルがおこりやすい子どもには？	22
III 【中学校の実践】	
・英単語を書くことが苦手な生徒には？	24
・忘れ物が多い生徒には？	26
・人とのやりとりが苦手な生徒には？	28
・集団に参加したがるしない生徒には？	30
・場の雰囲気を察知できない生徒には？	32
・国語が苦手な生徒には？	34
・学習に集中できない生徒には？	36
IV 【組織的な支援を進めるために】	
1 「学習支援教室」の体制づくり	38
2 校内支援体制づくり	39
V 「個別の指導計画」にチャレンジ	41
VI おわりに	44

I はじめに

平成19年4月より学校教育法等の一部改正が施行された。これにより、従来の障害児教育が対象としてきた児童生徒はもちろん、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒に対し、その一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導及び必要な支援を行うことが法律に明記された。このことにより、特別支援教育は、学校全体でしかもすべての教員が行うこととなった。

平成14年度に文科省が実施した全国的な実態調査では、学習や生活の面で特別な支援を必要としている児童生徒が小中学校の通常の学級に約6%在籍している可能性があることが報告された。平成18年度に徳島市が独自に実施した実態調査でも小学校で約5%、中学校で約4%の割合で在籍している可能性が報告されている。これらの調査はあくまでも学校の担任等の観察によるものであるが、このような児童生徒は学級の中で学びにくさや過ごしにくさを感じることが多くあり、このことがいじめや学力低下等につながる場合もあることが指摘されている。そこでこのような児童生徒の困り感に焦点をあてた学習指導や学級経営の工夫改善を試みることにより、支援を必要とする児童生徒だけでなくすべての児童生徒にとって分かりやすい授業づくりや一人一人を大切にする学級づくりにつながると考えられる。

徳島市特別支援教育調査研究ワーキングでは、今年度、小中学校の通常の学級における特別支援教育に視点をあてた学級経営や分かりやすい授業の工夫改善について実践研究を行い、学校現場における指導や支援のヒントを提案することを目的に調査研究を実施した。

本ワーキングにおける基本的な考え方は、次のとおりである。

- (1) 徳島市特別支援連携協議会の審議方針に基づくこと
- (2) 文部科学省からの通知、報告書並びに「小・中学校におけるLD（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）、高機能自閉症の児童生徒への教育的支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」をもとにすること
- (3) 徳島県教育委員会作成の啓発パンフレット、指導資料を参考にすること
- (4) 作成上の留意点
 - ① 現状の中でできる環境整備、配慮、支援を提案すること
 - ② 教職員の研修等に利用できる内容であること
 - ③ 特別支援教育を推進する上での課題を提起すること
 - ④ 個人情報の保護に十分留意すること

Ⅱ 小学校の実践

罫線がない枠に字を書くのが苦手な子どもには？

〈学級・授業での様子〉

- ・罫線がない枠に字を書くと、字と字、行と行が重なったり、整わなかったりする。
- ・まだ余白があるのに端の方にぎゅうぎゅう詰めで書いたり、枠からはみ出したりする。
- ・書き終わった後に、自分が書いた文章を読み返すことができない。
- ・掲示したり、グループ学習をしたりするときに、他の子どもがその文章を読みとることができない。

ホウセンカの葉の数が
たくさんふえてきたよ。前は
2まいだったのに、
今日は3まいにな
っていたよ。

ホウセンカの葉の数が
たくさんふえてきた
よ。前は12まいだ
ったのに、今日は3
まいになっていた
よ。

ホウセンカの
葉の数がた
んたんふえ
てきたよ。前
は12まい
だったのに、
今日は3まいにな
っていたよ。

〈考えられる要因〉

- ・一文字一文字の形や大きさ、字と字の空間、行と行との空間などを整えることが苦手である。
- ・その枠にどのくらいの文字の量が入るかを予測できない。
- ・自分がこれから書こうとする文章の量の予測がつかない。



〈取り組みの実践〉

アイデア1

罫線下敷き

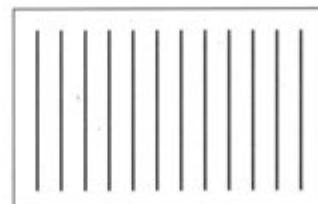
2種類の罫線を外表に重ね、ラミネートで補強。

太罫線と細罫線も同じように作る。
サイズはA4で作成。



- ・「罫線下敷き」を用意し、罫線がないワークシートに記入するときはそれを敷いて書くようにする。

- ・罫線の幅は、子どもが使用している算数ノートや国語ノートを規準にした。また、それとは別に、細罫線、太罫線の2種類も準備した。



アイデア2

ワークシートの工夫（文字の大きさや量をあらかじめ予想）

木工工場の見学	
名前()	
工場の様子	わかったこと

元のワークシート

・子どもが使用する枠と同じものに、文字代わりの○を書き込んだ見本を用意する。

・文章量が多く小さな文字で書く場合を想定したものには小さな○（図A）を、文章量が少なく大きな文字で書く場合を想定したものには大きな○（図B）を書き込む。

・実際に文を書く前に見本を見比べ、どちらの文字の大きさと書くかを予測してから書く。その際は、見本を下敷きにしたり、横に並べて書いたりする。

木工工場の見学	
名前()	
工場の様子	わかったこと
○○○○○○○○	○○○○○○○○
○○○○○○○○	○○○○○○○○
○○○○○○○○	○○○○○○○○
○○○○○○○○	○○○○○○○○
○○○○○○○○	○○○○○○○○
○○○○○○○○	○○○○○○○○

小さい文字の見本(A)



木工工場の見学	
名前()	
工場の様子	わかったこと
○	○
○	○
○	○
○	○
○	○
○	○

大きい文字の見本(B)

＜取り組みを通して＞

・これまで、罫線がない枠に記入することが苦手な子どものことを考え、自分でワークシートを作成する際にはできるだけ罫線を入れるようにしてきた。しかし、既存のワークシート等には罫線がない枠があること、罫線を入れてしまうと子どもが思う文章量に合わなかったり、絵を書くじゃまになったりすることなどがあるため、上記のような方法を考えた。

・罫線下敷きは、ラミネートで補強することで、ふつうの下敷き感覚で使うことができた。ふだんは、子どものノートの行の幅に合わせた基本の下敷きを使用するようにし、特別な場合に、太罫線と細罫線の下敷きを使用するようにした。

・罫線下敷きを使うと文章の行が整うようになり、自分でも読み返しやすいくことを実感していた。

・どのくらい書くかあらかじめ自分で予想する方法は、少し難しかった。教師が子どもから書きたいことを聞き出し、「それだったら（図A）くらいの文字で書いてみてごらん」と促すことの方が多かった。

・それぞれのワークシートに文字の大きさを示す（アイデア2）の方法より、どんなワークシートにも使用できる（アイデア1）の罫線下敷きの方が使いやすかったようである。

・今後は徐々に罫線下敷きの使用を減らしていき、下敷きがなくてもバランスのよい文章が書けるようにしていきたい。まずは、小さな枠の中で短い文章をバランスを整えて書くことから練習していきたい。

他のことに注意が移り、作業が進まない子どもには？

＜学級・授業での様子＞

- ・朝早く登校しても、周囲の友だちの動きに流されて、朝の準備が進まない。
- ・ぼーっとしている時間が多く、時間内に作業が終わらない。
- ・自分の作業は終わっていないのに、友だちが遊んでいるといっしょに遊んでしまう。
- ・教師や友だちからの声かけを待っている。

＜考えられる要因＞

- ・これからすべき作業の内容、量、そのために必要な時間などがイメージしにくい。
- ・作業の手順や優先順位を考えることが苦手である。
- ・自分の作業の進み具合を把握することが難しい。

＜取り組みの実際＞

アイデア1

スケジュールカード

（毎日の作業が同じもの）

- ◆朝や帰りの準備
- ◆係の仕事
- ◆そうじ

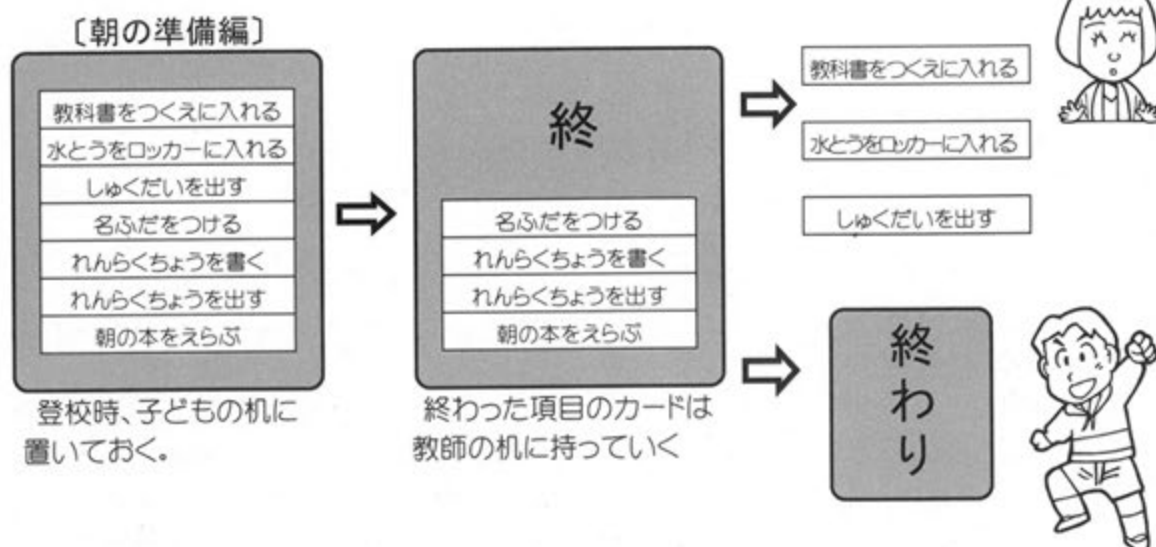
など

・登校してから始業までの間にすべき作業を細かい項目に分け、短冊状のカードにする。

・短冊をマグネットボードにはり、支援の必要な子どもの机に置いておく。

・一つの作業が終わったら、終わった項目のカードを教師の机のマグネットボードに移動する。

※プリント等で1枚の表にし、終わった項目にチェックをしていく方法でもよいが、教師がその子どもの作業状況を把握できるように、短冊状のカードを教師の机に持ってくる方法をとった。



アイデア2

赤色・青色の付箋

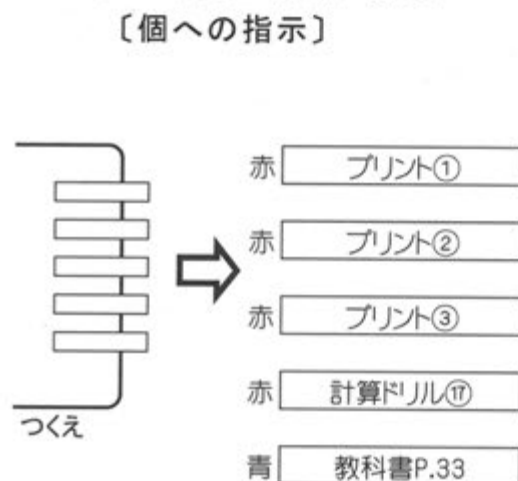
(作業の内容が変わるもの)

・学級全体に対して、これからする作業を説明した後に、支援の必要な子どもには作業内容を付箋に書いて机にはる。

・全体用に黒板に板書した内容で不十分な場合は、作業を細分化して示す。

・その時間内に必ず終わらなくてはならない作業は赤色の付箋、余裕があればする作業は青色の付箋で表す。

・作業が終わった項目の付箋は教師に渡す。



・終わった項目の付箋は教師に渡す。

＜取り組みを通して＞

・取り組みを始める前は、支援の必要な子どもにつきっきりになることで、他の子どもへの支援が行き届かないことや、逆に、他の子どもへの支援をしている間はその子どもの作業が全く進んでいないというようなことが度々あった。

・取り組みを始めると、その子どもから「もう半分終わった。」「あと2つで終わり。」などのことばが聞かれるようになった。子どもが自分の作業の進み具合を意識していることがよくわかった。

・作業が終わった項目のカードや付箋を教師に渡してくれることで、他の子どもの支援をしながらも、その子どもの作業状況を把握できるようになった。

・カードや付箋でその子どもの作業状況を示すことは、他の子どもにとってもわかりやすかったようである。以前は対象児の作業が終わっていても遊びに誘ったりしてしまう子どもが多かったが、「まだ終わってないからがんばれ」とけじめをつけることができるようになってきた。

・カードや付箋で表しにくい作業内容もあった。

・詳細なカードの項目を少しずつ大まかなものにしたり、自分自身で項目を考えたりすることが今後の課題である。

友だちの顔と名前が覚えられない子どもには？

＜学級・授業での様子＞

- ・名前を見てもノートやプリントを配布することができない。
- ・体育や集会などで整列をするときに、どこにならばいいのかわからない。
→周囲の子どもが「早く配って！」といらいらしたり、「どうしてわからないの？」と変な目で見たりする。
- ・友だちのことを話すとき、「〇〇さん」という言い方ではなく、「この人」「あいつ」などということばで友だちのことを表現してしまう。
→本人の前でも「この人」と言ったりするため、相手に不快感を与えてしまう。
- ・「友だちのいいところ探し」など、友だちについて考えるときに、全く内容が思いつかない。
- ・家庭での会話に友だちの名前を出すことができず、「友だちが誰もいないのでは？」と家族を不安にさせてしまう。



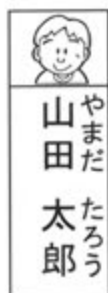
＜考えられる要因＞

- ・記憶をすることにつまずきがある。
- ・友だち関係がうまくいかないことが多く、友だちとのかかわり自体が減っている。
- ・家庭での会話や日記などの中で、友だちの名前を思い出すことができず、余計に記憶に残りにくい。

＜取り組みの実際＞

アイデア1

顔写真付名前カード



- ・顔写真と名前を組み合わせたカードを作る。
- ・日直カードとして黒板に掲示。支援の必要な子どもが、日直カードをはる係をする。
- ・名前カードを渡ししながら「〇〇さんにノートを配ってください」「〇〇さんと呼んできて」などの仕事を依頼する。
- ・友だちとのかかわりについて日記に書いたり家族に話したりするように促す。自力では難しいので「今日は〇〇さんとなわとびをしたことを日記に書こう」などとテーマを与える。帰る前に写真カードを見せ友だちの顔と名前、テーマを再確認する。

※その子どもが自分から友だちの名前を話題に出すことが難しい場合は、班や係が変わったときや、友だちとのかかわりの様子などを連絡帳で家庭に伝えておき、家族が話を引き出しやすくしておく。

アイデア2

ミニ座席表・ミニ整列表

1列	2列
山田	山田 青木
青木	佐藤 田中
佐藤	谷 吉野
田中	村上 岩井
谷	横田 小西

・「座席表」と「1列での整列」「2列での整列」などの表を縮小コピーしたカードを支援の必要な子どもに渡しておく。名刺サイズのクリアファイルに入れてポケットに常備。

→名前、相手の場所、自分がならぶ場所などがわからないときは、このカードで確認する。体育の整列では、体操服のゼッケンを手がかりにできるので、写真がなくてもわかりやすい。

アイデア3

友だちじてん

	やまだ たろう 山田 太郎
こんな人だよ！	
・サッカーが好き ・とくいな教科は算数と体育 ・妹となかよし	
こんなことがあったよ！	
トイレのスリッパをならべていたよ。	サッカーのドリブルを教えてくれたよ。
神社の秋祭りに家族で来ていたよ。	音楽係をいっしょにしているよ。

・一人一人の友だちの特長や、その友だちとの関わりについて書き込めるカードを用意し、「友だちじてんをつくろう」と学級全体で取り組む。

・最初は学級活動の時間や、帰りの会を利用して書き込んでいく。慣れてきたら気付いたときに自由に書き込ませる。

・支援の必要な子どもは、自由に自分から書き込んでいくことは難しいので、「隣の席」「同じ係」などと身近な友だちを指定して書かせる。

・休み時間等に楽しく活動しても、相手の名前を意識できていなかったり、すぐ忘れてたりすることが多いので、「今日、〇〇さんとおにごっこをしたことを書こう」と、具体的に書く内容を指示する。



☆友だちの協力

・「運動が苦手な人」「算数が苦手な人」がいるように、「名前や顔を覚えるのが苦手な人」もいるということを周囲に伝え、お互いに助け合えるような雰囲気を作る。

・名前がわからなくて困っている人がいたら「〇〇さんは6班にいるよ」と教えたり、配布物がなかなか届かないときは自分から「こっちこっち」と声をかけたりするようなちょっとした配慮を心がけさせる。

<取り組みを通して>

・取り組みを繰り返すことで、少しずつ友だちの名前を覚えられるようになったものの、かかわりが減るとまた忘れてしまうというようなこともあった。

・名前がわからないときに事前に教師にたずねたり、座席表を見て確認したりするなど、相手に不快感を与えない方法を意識できるようになった。

・周囲の子どもたちが支援の必要な子どもの苦手な部分を理解し、さりげなく支援をしてくれることも大きな力となった。

片づけの苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

- ・机の上に、その時間の学習に必要なものだけが散乱している。
- ・机の周りには、鉛筆やプリントなどが落ちたままになっている。
- ・紛失物が多い。

＜考えられる要因＞

- ・形をとらえるのが苦手である。
- ・片づけに関する教師の指示を聞き逃している。
- ・集中しにくく、片づける前に次の活動に移ってしまう。
- ・根気がなく、めんどろなことをしたがない。

＜取り組みの実際＞

アイデア1

学習道具の位置

- ・机の上には必要最小限のものだけにしよう指示する。
- ・聞き逃した子どものために、黒板にも提示して視覚的にも分かりやすくする。



アイデア2

保管場所の決定

- ・持ち物の保管場所を決め、子どもが管理する物を減らす。



アイテム3

個人用落とし物入れ

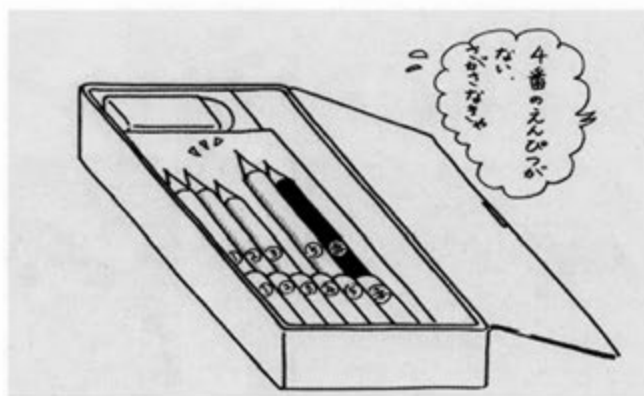
- ・個人専用の落とし物入れを設置する。



アイテア4

筆箱の工夫

- ・鉛筆と筆箱に番号をつけて、きちんと片づけられるようにする。



＜取り組みを通して＞

- ・学級の中には、片づけの苦手な子どもがたくさんいる。学習に必要なものが机の上に出ていて学習しにくい状態になっていることがよくあった。そこで、机の上に置くものは細かく指示し、黒板にも絵を示すと、学級全体が机の上の片づけに気を配るようになった。机の上が片づくとう学習しやすいことが分かり、進んで片づける子もいた。
- ・特に片づけの苦手な子どもについては、保護者と相談し、お道具箱を教師が預かったり鉛筆と筆箱に番号シールを貼ったりなどの支援をした。片づけの負担が減っただけでなく、片づけを上手にするヒントにもなったようだ。
- ・落とし物が多い子どもの持ち物は、拾ったら個人の落とし物入れに入れてもらうことにした。机の上に置くとまた落とすので、どうしたら便利か自分で考えて箱を用意した。学級全体の落とし物入れから探す手間が省けて負担が減った。
- ・片づけの苦手な子は、自分の力だけでは十分にはできない。助け合う子どもを育てること、教師と保護者が協力して支援することも重要なポイントである。

忘れ物の多い子どもには？

＜学級・授業での様子＞

- ・教科書や体操服など、日常的に忘れ物をする。
- ・宿題や提出物を持ってくるのを忘れる、持ってきていても提出を忘れる。
- ・連絡帳や連絡袋を忘れる。

＜考えられる要因＞

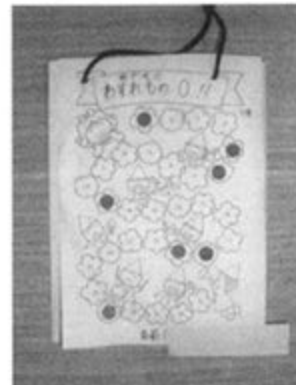
- ・時間割をする習慣がついていない。
- ・記憶が苦手である。
- ・片づけが苦手で、物がどこにあるかわからなくなる。
- ・家庭の生活リズムが崩れ、学習に対して無気力になっている。

＜取り組みの実際＞

アイデア1

忘れ物0カード

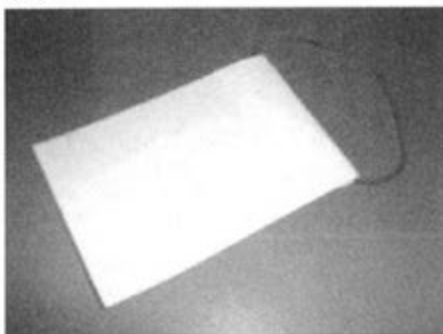
- ・忘れ物が0の日には、シールを貼る。
- ・シールが5つたまると絵シールがもらえる。



アイデア2

メモ付き輪ゴム

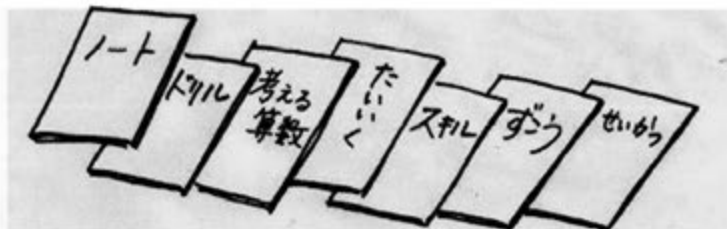
- ・忘れては困るものを書いた紙を輪ゴムにつけ、手首に通して帰る。家庭で準備できたら外す。



アイデア3

教室での保管

- ・忘れ物を減らすため、家に持って帰ると忘れてきそうなものは学校に置いておく。



アイデア4

家庭との協力

- ・家庭と協力して忘れ物をなくす方法を考える。
 - ①自分で時間割ができた日には、家庭で連絡帳に丸をつけてもらう。
学校で教師が丸を確認し、シールを貼る。
 - ②夕方、時間割をしたか確認の電話を入れる。



<取り組みを通して>

- ・学級の子どもたちの忘れ物の多さには悩まされ続けている。忘れ物しやすい子は、片づけも苦手な子が多く、片づけの工夫と重なる部分も多い。
- ・家庭の協力を得ようにも、様々な事情からうまくいかない場合もあった。そこで発想を転換し、置ける物は学校に置くことにした。子どもたちの負担も減り、学習に支障をきたすことも少なくなった。
- ・どうしても持ってこなくては困る物については、メモ付きの輪ゴムをつけて帰るなどの工夫をした。連絡帳を見忘れる子にも効果的であった。子どもたちは自主的に忘れそうな物をメモし、手首につけて喜んでた。
- ・忘れ物をしないことと同時に、忘れたときにどうするかという指導も必要である。物を借りたり共用したりするときのマナーを身につけることや、助け合いができる学級のなかまづくりをすることが何より支援になると感じた。

板書をノートに写すのが苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

- ・漢字を覚えていないので、書くのに時間がかかる。
- ・形を整えて文字が書けず、何を書いているかわからなくなる。
- ・どこまで写したかがわからなくなる。

＜考えられる要因＞

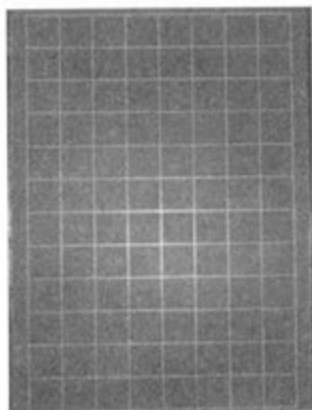
- ・形をとらえるのが苦手である。
- ・記憶するのが苦手で、文字を覚えにくい。
- ・細かいところまで見る力が十分についていない。

＜取り組みの実際＞

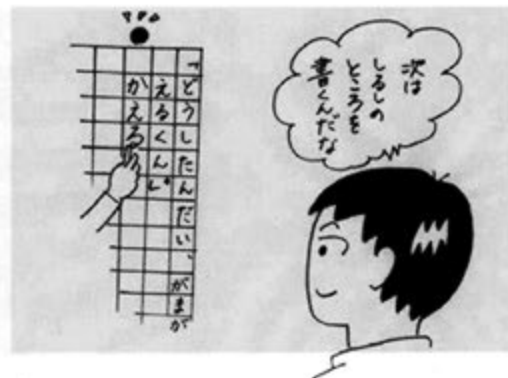
アイデア1

マス目黒板

- ・ノートと同じマス数のマス目黒板に書く。



- ・一度にたくさん書かない。
- ・一行書いて、子どもたちがノートに書けたら次の一行というペースで書いていく。
- ・写している行に印をつける。



アイデア2

板書の工夫

・黒板を見て写すのが難しい子どもは、隣の子どものノートを見て写したり、ホワイトボードに書いて机の上に置き、それを写したりする。



・細かいところまで見る習慣をつける。

- ①パズルやカルタなど、見る力を育てる遊び道具を教室において、休み時間にできるようにする。
- ②朝の活動で、漢字ビンゴや筆順リレー、間違い探し、迷路などを取り入れる。

アイデア3

漢字の覚え方

・新出漢字の学習の仕方を工夫し、漢字の定着を図る。

- ①唱え方を子どもと一緒に考えて、唱えながら書いて覚える。
- ②空書きやなぞり書きを何度も繰り返す。



＜取り組みを通して＞

・マス目黒板に書いたりゆっくり板書をしたりという配慮をすると、クラス全体の子どものノートが整い、見やすいものになっていった。見やすいノートは学習への意欲も向上させ、教師もノートの指導がしやすい。支援の必要な子どもだけでなく全員にメリットがあった。

・友だちのノートやホワイトボードを横に置いて写す場合、快くその状況を受け入れる学級の雰囲気作りが必要である。

・形をとらえるのが苦手なために、文字の見分けがつきにくく漢字がなかなか覚えられない子どもは、家庭でも唱えて書いたり、見る力をつける遊びをしたりしている。家庭と協力して同じ取り組みをすることで、だんだんノートを書くのが上手になってきた。見る力がついてきていると感じた。

学習に集中しにくい子どもには？

＜学級・授業での様子＞

- ・授業中（算数科）は、苦手な課題をしたがらない。
- ・集中力が続かなく、気分のムラがある。
- ・黒板の文字をノートに書き写すことや、文字を書くことが苦手である。
- ・場面に関係なく声を出し、独り言を言う。

＜考えられる要因＞

- ・「～ができません。」「わからない。」という自己評価が低い。
- ・行動の切り替えがうまくいかず、次の活動がイメージしにくい。
- ・「できた」と実感できる体験が少ない。
- ・集中する時間が短い。

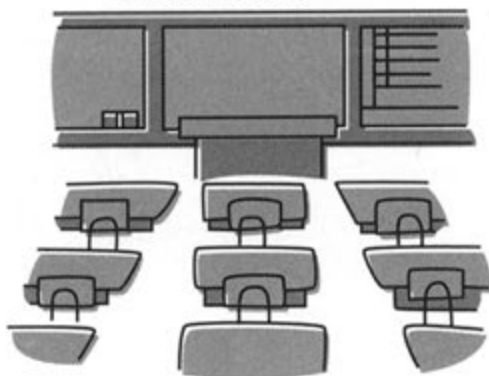
＜取り組みの実際＞

アイデア1

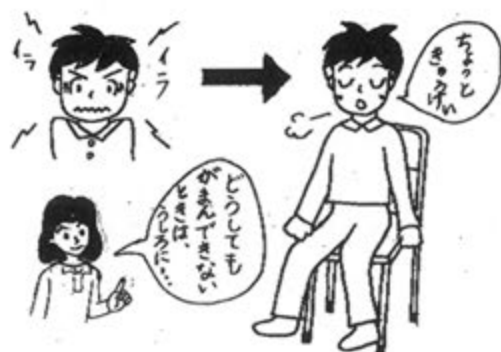
座席の位置とリラックススペース

- ・座席は、注意がそれにくく声かけなどがしやすい位置にする。
- ・気分転換できるリラックススペースを教室のすみに用意する。

＜座席の位置＞



＜リラックススペース＞



* 緊張を和らげ、
学習の持続へ
とつなげる。

アイデア2

指示の工夫

- ・指示を出すときは、1つずつにする。
- ・「今は書く、今は聞く。」と分けて活動を指示する。
- ・「～しては、いけません。」ではなく、「～しましょう。」と肯定的な言い方で話す。



アイデア3

板書の工夫

- ・板書をみてノートがとれるように、わかりやすく書く。
- ・「ここからここまで」と色チョークで囲む。
- ・板書させたいプリントを用意する。

わかりやすい板書の工夫

- ・板書の量は少なめ
- ・文章は短め
- ・色チョーク
- ・板書と同じプリントを用意する

<取り組みを通して>

- ・TT指導では、担任と共通理解して取り組むと支援がうまくいく。
- ・少しずつ見通しがもてるようになり、離席や問題行動も少なくなってきた。
- ・言葉がけやヒントカードなども工夫をすることは、他の子どもにも効果的だった。
- ・授業の流れを一定にすることで、次は何をするのかということの見通しがもてた。
- ・教室のすみにリラックススペースを用意したので、突発的で不適切な行動が少なくなってきた。
- ・プリント利用で、ノートに早く確実に写せるようになった。

算数が苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

- ・算数の授業中、ぼーっとしている。
- ・指示された活動ができない。
- ・集中してきちんと話を聞くことができてない。

＜考えられる要因＞

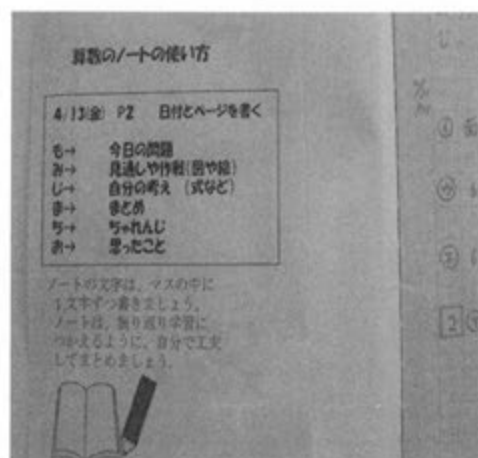
- ・演算の手順が理解できていない。
- ・文章の意味が理解できてない。
- ・文章を読んで内容を理解するのが苦手である。
- ・一斉の指示では自分に言われているという意識がもてない。
- ・間違い経験が多く算数への苦手意識が強い。

＜取り組みの実際＞

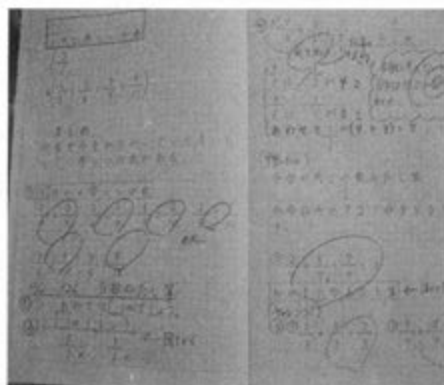
アイデア1

算数の学習の流れ

- ・学習の流れをパターン化する。
- ・ノートの使い方を指導する。
(ノートの表紙裏に算数のノートの使い方を貼付)



- ・机間指導で子どもの解答に応じて○つけ法でノートに○をつける。



解決の糸口になる声かけをする。
×はつけずに全員が○になるようにしていく。途中までできている場合はできているところまで○をつける。

アイデア2

はてなボックス・なんでもボックス

- ・学習の導入で、はてなボックスを使い、興味を持たせる。

例えば……五年生の分数を学ぶ前に、三択クイズなどにして、学習をする際の手がかりにする。



「分数で表しているのはどれでしょう。」

問題が表で、ボックスを抜けると裏の答えがでる。

- ・なんでもボックスには、復習・ヒントカード・チャレンジ問題・本日の黒板ノートなどをプリントして、子どもに自由につかわせる。発展学習に進む子どもは、チャレンジ問題などをする。



アイデア3

小集団指導コーナー

- ・教室の黒板前に机を用意して置く。(2個ぐらい)
自分で問題を解くとき、一人では考えが進まない子が、教師と一緒に考える場所とする。
- ・前時を振り返りながら学習を進め、できない箇所の確認をし、定着できるようにする。



＜取り組みを通して＞

- ・学習の流れをパターン化することで、学習の仕方が分かりだし、自分からノートに書きうつすようになってきた。
- ・○つけ法をすることにより、子どもに自信がつき、発表も多くなった。
- ・なんでもボックスから自分でチャレンジ問題を出して解くことで、計算の正確さがついた。
- ・自分からヒントカードを取ったりやチャレンジ問題を解いたりすることで、意欲が出てきた。
- ・小集団コーナーがあることで、細かな指導ができた。

自分の感情が抑えられない子どもには？

＜学級・授業での様子＞

- ・常に自分のペースで動き、思いついたらすぐ行動に移すためトラブルが多い。
- ・思い通りにならない時や興奮した時に、叫んだり友だちをたたいたり衝動的な行動をしてしまうことがある。
- ・好きな活動にこだわるため、時間を忘れてしまい授業に遅れることがある。

＜考えられる要因＞

- ・自分の感情や行動をコントロールする力が弱い。
- ・先のことが予想しにくい。
- ・言語理解や対人関係が十分でなく、周りの状況を理解することが難しい。

＜取り組みの実際＞

アイデア1

リフレッシュルーム

- ・教室の後方に気持ちを落ち着かせる場所を作る。
- ・支援の必要な子どもはもちろん、だれでもいつでも利用できるようにする。
- ・席を移動する前に教師に声をかける（合図でもいい）約束をする。
- ・砂時計などを使い、落ち着くまでの時間を自分で調整できるようにする。
- ・感情の高ぶりや不安定さを自分で自覚できるようにする。



アイデア2

- ・何かを我慢するなど、達成可能な目標を本人自らが立て、自己評価する。
- ・守れたらすぐ評価（シールをはる・ポイントをためる等）して達成感を持たす。
- ・達成感を繰り返し持つことで自尊感情を高めていく。

アイデア3

イラストを使ったソーシャルスキルトレーニング

- ・落ち着かせるために「大丈夫、大丈夫。」と声をかけたり、一緒に深呼吸をしたりする。
- ・落ち着くのを待ってから視覚的にわかりやすいマンガの吹き出しを使い、相手の気持ちや場の状況を理解させる。
- ・うまくいく会話や行動を教師と一緒に、考え練習する。
- ・専用のノートに記入しておくこと、後で振り返って繰り返し見ることができる。



アイデア4

クラスでの取り組み

- ・トラブルがあった時は、学級全体で考える。
- ・トラブルの発端となった会話や行動を黒板でまとめ、子どもの目線で分析する。
- ・個人を攻めるのではなく、適切な会話や行動を、みんなで導き出す。
- ・子どもたちが解決策を考えたら、認め賞賛する。

＜取り組みを通して＞

- ・思いついたらすぐ発言・行動する子どもが何人かいたので、学級全体で考え解決していく方法を随時とった。
- ・簡単な図式化をしながら何がトラブルの発端になったかを学級全体で探っていき、いろいろな考え方を聞くことは、子どもも納得しやすかった。
- ・何度も考えていくと、短時間で解決できるようになっていった。
- ・初めは、気持ちが不安定になりそうな時に教師がクールダウンしてくるように声をかけていたが、自分の気持ちの高ぶりを自ら認識し、自分から自覚していく様子が見られ、少しずつ落ち着きが見られた。
- ・リフレッシュルームの椅子の向きは窓側にしていたが、本人に任せ、ついたても時々利用することがあった。
- ・イラストを使った支援は、子どもがとても興味を持った。
- ・自分から専用のノートを見ている場面もあり、行動のヒントにしているようであった。

読むこと・書くことが苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

- ・音読はたどたどしく、何度も同じ所を繰り返して読み、間違いが多い。
- ・カタカナを半分以上覚えていない。
- ・読みにくい文字を書く。
- ・漢字を覚える事が苦手で、適当に読んだり書いたりする。
- ・学習中、自分の意見は発表できる。

＜考えられる要因＞

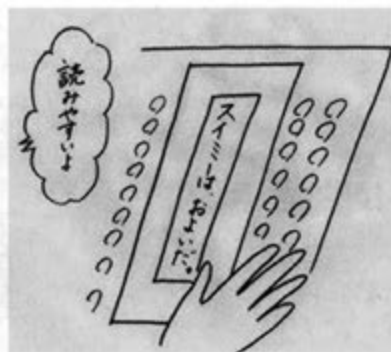
- ・文字と音とを結びつけにくい。
- ・記憶の弱さから、意味のあることばとしてとらえることが十分でない。
- ・読む部分（図）だけでなく周りの部分（地）まで目に入ってしまう。
- ・形をとらえる空間認知が弱い。
- ・細かい手先のコントロールが難しい。
- ・目と手の協応が十分でない。
- ・注意の集中が短く、学習が習得しにくい。
- ・見え方に問題がある。

＜取り組みの実際＞

アイデア1

スリット枠

- ・1行文のスリットをあけた枠で、読む（書く）部分だけが目立つようにする。
- ・緑の透明シートを読もうとする箇所にあてて読む。（いくつかの色を試した結果、緑のシートが読みやすいとのことであった。）



アイデア2

フラッシュカード

- ・国語学習の始めに、フラッシュカードを使っての漢字やことばあてクイズを行う。
- ・瞬時に見て記憶することの練習とし、繰り返すことで自信を持たせる。



アイデア3

読みの工夫

- ・教科書やテストに、ふりがなや文節を区切った「/」を書いておく。
- ・初めての文章はまず範読し、次に一斉読みをしてから一人で読ませ、苦手意識を少なくさせる。



アイデア4

拡大プリント

- ・テストやプリントは拡大したA3タイプと通常のタイプを子どもが自由に選べるようにする。



〈取り組みを通して〉

- ・見え方（目の動き・字の大きさによる違い・左右差など）に問題はないのか、確かめる必要があると感じた。この子どもはテストなどの字の大きさにより意欲に差が見られた。
- ・目の運動能力（上下左右・大きく回転・より目）などが、スムーズにできているかを確認して、目の動きが悪ければ訓練する必要がある。
- ・個別に対応できる時間に、目の体操や目を使うゲームなどをしたことが有効であった。
- ・スリットは枠の大きさを1行2行3行といろいろ作ると、読み書きの両面で使用でき、有効であった。
- ・フラッシュカードは、自分の番がくるという緊張感もあり、注意集中を高めながら楽しんでできた。
- ・フラッシュカードの学習は、支援の必要な子どもが、文字に集中し達成感がもてるよう、出すカードや見せる時間を配慮して、自信が持てるような活動にした。
- ・ふりがなを付けながらも漢字が読めるようになると、意味のあることばとしてとらえられるためか、読みやすいようであった。

遊びのルールが守れず、 友だちとトラブルがおこりやすい子どもには？

＜学級・授業での様子＞

- ・友だちからは自分勝手と思われがちである。
- ・どうして相手が怒っているのか、場の状況がわかっていないことがよくある。
- ・トラブルを解決するために、教師が個別にゆっくり伝えたとわかることもある。

＜考えられる要因＞

- ・聴覚からのことばの理解が苦手なために、ルールがわかりにくい。
- ・ことばの記憶が苦手なために、ルールを覚えるのが苦手である。
- ・友だちがされて嫌なこと（相手の気持ち）がわかりにくい。
- ・自分がして欲しいことを、友だちにうまく伝えられない。
- ・この行動をすると、次にどのような事が起こるかを予測しにくい。
- ・ソーシャルスキル（人と上手につきあうためのマナーやこつ）が十分身につけていない。

＜取り組みの実際＞

アイデア1

ソーシャルスキル1

- ・予想されるトラブルに対して、予め適切な行動を練習しておく。
- ・トラブルが起こった直後に、教師がどのようなことばかけや態度が好ましいか、モデルをしめす。



アイデア2

ソーシャルスキル2

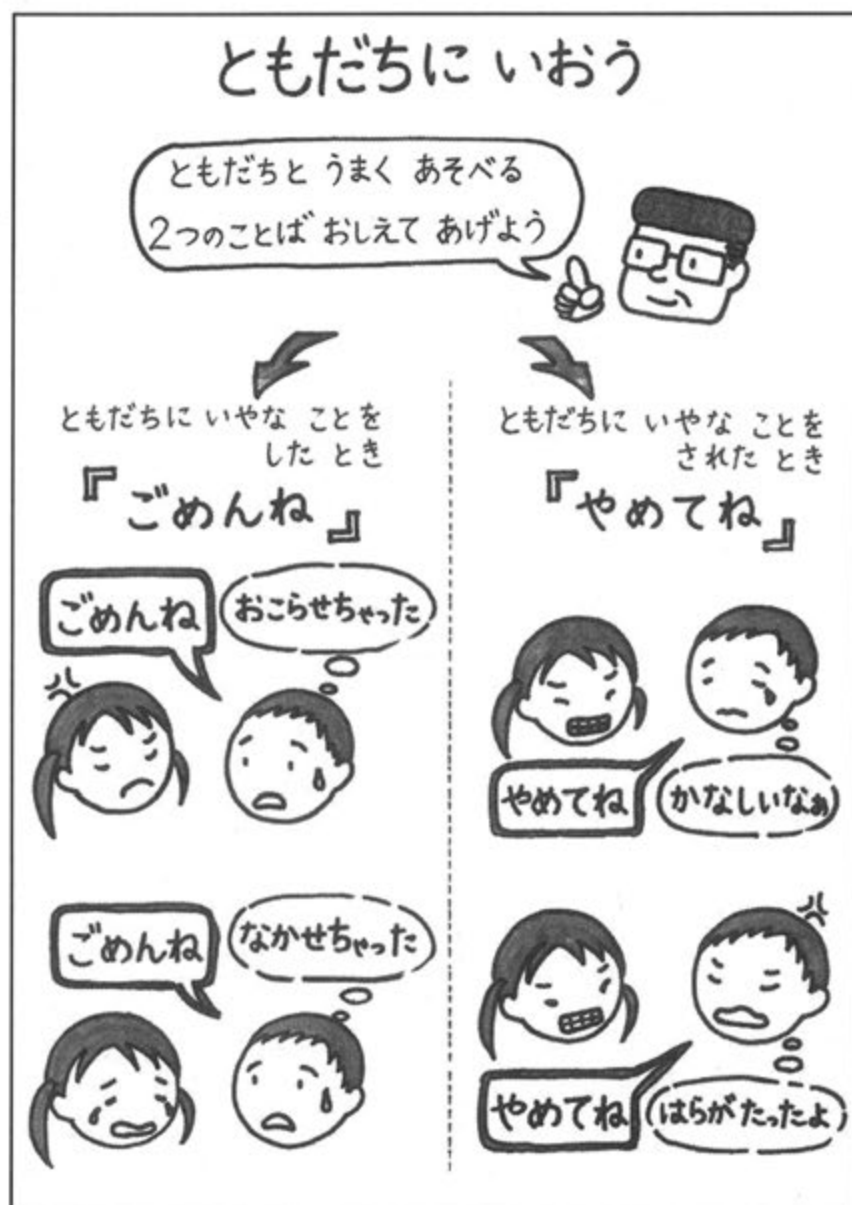
- ・友だちの誘い方、上手な聴き方、上手な頼み方など必要な課題を設定する。



アイデア3

ソーシャルスキル3

- ・学級活動や道徳の時間にソーシャルスキルを身につけるための場を設定する。



＜取り組みを通して＞

- ・相手の気持ちを理解し、自分がどう行動すればよいかを知るために学級全体でソーシャルスキルを身につける必要性を感じた。
- ・設定された学習時間の中で、好ましい行動の手本を見たり、練習したりすることで、実際の場面でも少しずつ行動できるようになってきた。
- ・聞き取りの苦手さを支援するために、ソーシャルスキルの学習で動作化することは有効であった。
- ・トラブルの直後にルールを確認して、教師が手本を示すことは有効であった。

Ⅲ 中学校の実践

英単語を書くことが苦手な生徒には？

<学級・授業での様子>

- ・ 黒板からノートへの板書はかなり難しく、ノートをとるのがかなり困難である。
- ・ まっすぐに書こうとするが、線からはみでて、文字の大きさが不揃いとなっている。
- ・ b や d など鏡文字を書いたり、似ている文字や f と h のまちがいなどがある。
- ・ 英語の文章を書くとき、単語と単語の間があげられず文の構成が苦手である。
- ・ 筆圧が弱い。
- ・ 同じ練習を繰り返すことが苦手である。

<考えられる要因>

- ・ 左に書かれてあることを右に書き写すとき、視点が動くためうまく書けていない。
- ・ 書くときに親指とひとさし指に力が入りすぎているため、文字を書くのに時間がかかる。

<取り組みの実際>

アイデア1

インターネットの利用

(ソフト名「ネットレッスンラボ」 <http://netlessonlab.infoseek.co.jp/>)

- ・ 視点が動きにくいパソコンを使った学習を行う。
- ・ すぐに答えの確認ができるので自主的に学習できる。
- ・ 小学校1年～6年の算数、中学校1年～3年までの数学・英語・社会の基礎的な内容が系統的に学習できる。(「城東中学校」のホームページから、アクセスできる)



操作は簡単。ゲーム感覚で楽しみながら学習ができる。

マス式英単語レッスン



- ・アルファベットをクリックするだけでマスの中に答えが記入できる。
- ・答えがわからないときは、ギブアップをクリックすると正解がでる。
- ・点数やランキングを楽しみながら、練習することができる。
- ・例えば、「ピー・オー・ワイ、ボーイ、少年」と声を出しながら練習させるなど聴覚的な刺激も入れながら覚えさせる。

アイデア2

ワークシートの工夫

- ・2B以上の濃い鉛筆を使う。ノートを手で押さえながらゆっくり書くように指導する。
- ・同じ字をたくさん練習するのが苦手なので、3～4回の練習になるようにワークシートを作る。
- ・ノートは学年指定のノートにこだわらず、使いやすい線が入ったものを使うように助言する。
- ・ワークシートを提出した時は、「はげます」「ほめる」「大きな○」など細かい「気持ちのサポート」で支える。
- ・家庭でも同じような方法で練習してみるように、保護者に協力してもらう。

単語練習		
英 語	意 味	練習
day		day
home		home

<取り組みを通して>

ネットレッスン・ラボで英単語の練習をすると、解答するスピードは大変早く、正解率も学習すればするほど伸びることがわかった。また、書くことの併用で、なかなか覚えられなかった単語も、徐々に書けるようになった。

忘れ物が多い生徒には？

<学級・授業での様子>

- ・毎日忘れ物をする。
- ・忘れ物が多いため、周囲からだらしがないと思われる。
- ・家庭との協力が得られにくい。

<考えられる要因>

- ・記憶するのが苦手である。
- ・自分で持ち物をそろえる習慣が定着していない。
- ・深夜遅くまで起きている。
- ・忘れ物をしたら困るという意識がない。

<取り組みの実際>

アイデア1

「忘れ物ゼロ作戦」

- ・忘れ物をする生徒は、学級の中にもたくさんいるので、学級の問題として話し合う。
ア 夕食前を「時間割タイム」とし、全員が翌日の準備物を確認することを決める。

忘れ物ゼロ作戦

帰りの学活	明日の時間割と持ってくる物を確認し、生活記録に書く
自宅夕食前	時間割タイム 時間割を確認する習慣をつけよう
(翌日) 朝の学活	持ち物チェックタイム ・カードに自己評価する ・カードを提出し、忘れ物がなければシールをクラス表に貼る

クラス表のシールが目標に達すれば、クラスの〇〇〇〇会があるのでがんばろう！

参考文献 『ここがポイント 学級担任の特別支援教育』

図書文化出版 河村茂雄 編著

イ 朝の会で「持ち物チェックタイム」をとり、カードで自己評価する。

忘れ物ゼロ作戦 自己評価カード

月	日	曜日	氏名	
例	項 目		○ △	忘れた物・反省など
1	教科に必要な物			
2	教科の宿題			
3	毎日の自主学習			
4	毎日のセミナー			
5	その他(通知・提出物・ネクタイなど)			

○ ……忘れずにできた △ ……忘れてしまった
4つ以上○の人……クラス表にシールを貼ろう

ウ 「忘れ物ゼロ作戦」を実行する。

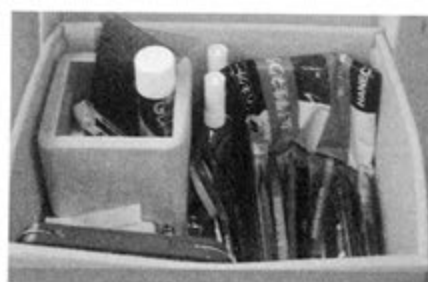
朝の会で持ち物を確認し、カードに記入して、提出する。○が4つ以上あれば、クラスの忘れ物調べ表にシールを貼る。

忘れ物ゼロ作戦 自己評価表				
月	日	曜日	氏名	
例	項 目		○ △	忘れた物・反省など
1	教科に必要な物		○	宿題に準備はできていない、忘れ物があった。
2	教科の宿題		○	忘れ物があった。
3	毎日の自主学習		○	忘れ物があった。
4	毎日のセミナー		○	忘れ物があった。
5	その他(通知・提出物・ネクタイなど)		○	忘れ物があった。

アイデア2

「忘れ物ストップボックス」

- ・使ったら、必ず元の位置に返す。
- ・ボックスは、後ろのロッカーの上に置いておく。
- ・みんなが使うので、大事に扱う。



<取り組みを通して>

忘れ物を学級の問題として共有し、みんなで取り組むことで、学級全体が忘れ物をしないように準備・確認しようとする意識が高まった。

人とのやりとりが苦手な生徒には？

<学級・授業での様子>

- ・具体的に見えていることを言い表したり、単語での表現はできるのに、相手の意図が汲み取れなくて会話が成立しにくい。
- ・質問への受け答えがちぐはぐになる。
- ・自分が言いたいことをどう表現してよいかわからないことが多く、口数も少ない。

<考えられる要因>

- ・うまく話せないことで周囲から笑われたり、何度も注意を受けたりするうちに人前で話すことを嫌がるようになった。
- ・相手の話や質問されていることを聞き、理解することが十分にできていない。
- ・「話の内容がまとまらない」「ことば足らずで話の展開がわかりにくい」などことばによる表現が苦手である。

<取り組みの実際>

アイデア1

帰りの会のスピーチ

- ・班活動にスピーチを取り入れ、班ごとに自分の得意とするものや人に伝えたいようなテーマを決め、簡単なスピーチを行う。
- ・発表する班は、事前に相談したり班内で練習したりする。
- ・聞く側は、発表者を拍手で迎え、話しやすい雰囲気をつくる。
- ・写真や実物を持つなどの工夫をさせると、話しやすくなる。

アイデア2

エンカウンターエクササイズ

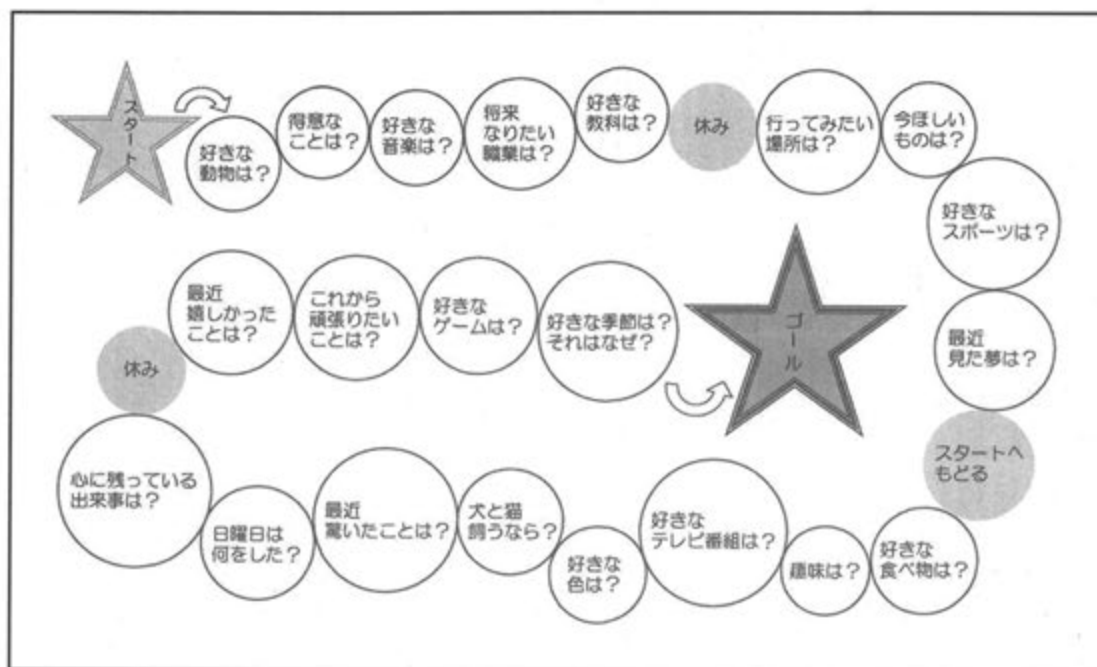
- ・『すごろくトーク』・・・さいころゲームを行い、出た目について自分の思いや体験を語る。話を聞いてもらえる喜び、友だちの新しい面を知る楽しみを感じることができる。

【進め方】

- ①ゲームの説明をする。
 - ②聞いている人は話してくれたことについて、「えー」「へんだよ」などの否定的な発言をしないよう約束させる。
 - ③スタート地点に自分のコマを置き、さいころを振る順番を決める。
 - ④ちょうどの数でゴールできる。全員がゴールするまで待ってもよいが、一人がゴールしたら終了してもよい。
 - ⑤お互いの感想や印象に残ったことをカードに書いて渡す。
 - ⑥このエクササイズの振り返りを行う。
- ・学活の時間に行う。(1グループ6人程度)

- ・なかなか話を始められない生徒に対して、せかすことがないように注意する。
- ・班の中に教師も参加し、何について話したらよいか具体的に説明を補足するなどの支援を行う。

<すごろくトーク>



MJワークシート

自分のことを紹介しよう。みんなに知ってもらおう。

名前

学年

好きなこと

最近の出来事

友達

先生

家族

ペット

趣味

将来の夢

好きな食べ物

好きな色

好きな季節

好きな動物

好きな場所

好きな音楽

得意なこと

苦手なこと

これから頑張りたいこと

心に残っている出来事

最近嬉しかったこと

犬と猫飼うならどっち？

日曜日は何をした？

スタートへもどる

<取り組みを通して>

スピーチにも慣れ、短いながらも自分のことばで話せるようになった。ことばがなかなか出てこないこともあるが、授業でも大きな声で発表できている。支援を継続するとともに、相手に受け入れられているという安心感を得られる学級づくりをしていきたい。

参考文献

『エンカウンターで学級づくり12か月』

明治図書 八巻寛治・高橋伸二 著

集団に参加したがない生徒には？

<学級・授業での様子>

- ・自分からかわりを持たず、一人でいることが多い。
- ・グループ活動にも消極的で、話し合いにうまく参加できない。

<考えられる要因>

- ・集団の中で活躍の場が少なく、自分が受け入れられていないのではないかと自信をなくしている。
- ・友だちとのかかわり方がわからず、他者への関心も薄い。
- ・自分の周りで何が起きているかを理解するのが苦手である。
- ・集団の中での自分の役割やルールを理解することが、苦手である。

<取り組みの実際>

アイデア1

班活動の役割担当

- ・班の中に支援の必要な生徒が取り組みやすい係をつくり、仕事を分担する。
【例・・・班員の日記を集める係】
- ・1週間に1つ班活動を割り当てる。それぞれが、班員として班活動の準備や進行に加わることで活躍の場をつくる。
【例・・・背面黒板の掲示、ゲーム、スピーチ】

アイデア2

エンカウンターエクササイズで人間関係づくり

- ・『トラストアクション』・・・一本締めや三三七拍子などの簡単なゲームから始め、ペアから4人、8人と人数を増やしながら一斉に立ち上がり座るというエクササイズを行う。この活動を通して、気持ちをそろえる心地よさや協力する大切さを体験し、信頼感を培う。

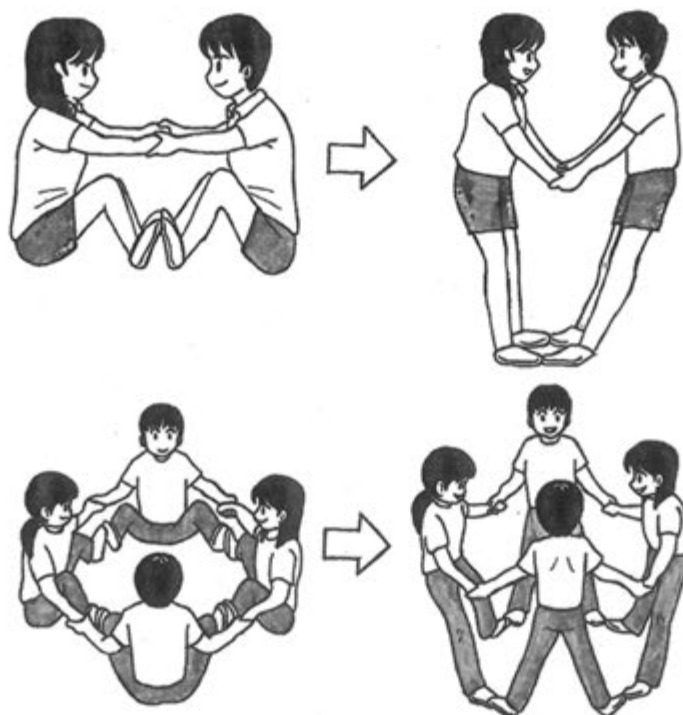
<その他のエクササイズ>

パスデーチェーン、伝言ゲーム
いいところ探し、握手であいさつ
トラストウォーク、人間知恵の輪
並びかえゲーム、新聞ジグソーなど

- ・総合的な学習の時間に学年全体で行う。
(学級単位でも実施可能)



<トラストアクション資料>



<取り組みを通して>

少しずつではあるが、班員の一人として班活動の役割をこなせるようになった。班や学級集団での役割を果たすことで、集団の中で認められ、自分自身も集団に参加しているという実感が持てるようになってきた。

参考文献

『エンカウンターで学級づくり12か月』

明治図書 八巻寛治・高橋伸二 著

場の雰囲気を感じ取れない生徒には？

<学級・授業での様子>

- ・自分勝手と思われてしまうような行動や発言をする。
- ・きつい言い方をしてしまい、トラブルとなりやすい。

<考えられる要因>

- ・全体的に場の様子を見るのが苦手で、一部分にだけ注目して判断する。
- ・相手の気持ちを推し量ることが難しい。
- ・自分の言動がどう受け止められているかわからない。

<取り組みの実際>

アイデア1

ロールプレイ

- ・その場面を劇仕立てにして、相手の役、本人の役を演じる「ロールプレイ」で、自分の言動や相手の気持ちに気づかせる。



【留意点】本人に劣等感を感じさせたり、反抗的な気持ちを起こさせないようにすることが大切。演技を嫌がる場合には、観客としての参加にとどめる。

アイデア2

状況の説明

- ・周りの様子をわかりやすく言語化したり、具体的にはっきりとことばを省かず説明する。
- ・叱責や注意では改善しないことが多いので、穏やかな口調で話をする。



アイデア3

「嫌なことば」と「うれしいことば」

- ・学級全体で「言われて嫌なことばと言われてうれしい言葉」について話し合い、出た意見をまとめ、学級全体へ知らせる。

<例> 言われて嫌なことば	言われてうれしいことば
・ばかじゃないの ・これぐらいのこともできないのか ・あっち行け ・身体の特徴やあだな	・すごいね ・ありがとう ・ドンマイ ・大丈夫？ ・気にするな ・力になるよ ・おめでとう ・最高

<取り組みを通して>

ロールプレイなどを通して、自分の姿を客観的に見つめることができ、少しずつ相手の気持ちを考えながら行動できるようになった。また、学級の仲間の意見を聞くことで、自分の言動がこういった感情を持たれているかに気づくこともできた。個人的に声かけをしたり、指導する機会を増やすと同時に、学級の仲間の生の声を伝え合うことも大切だと感じた。

参考文献

『教室でできる特別支援教育のアイデア 中学校編』

図書文化 月森久江 編集

国語が苦手な生徒には？

<学級・授業での様子>

- ・授業に集中できずに私語をしたり、机にうつぶせになったりする。
- ・書くことが苦手で、ノートをとるのに時間がかかる。
- ・何度も説明しないと指示された活動ができない。

<考えられる要因>

- ・集中して話を聞くことが苦手である。
- ・耳からの情報が得られにくい。
- ・空間認知が弱く、漢字が覚えにくい。



<取り組みの実際>

アイデア1

板書の工夫

- ・原則として板書は授業の途中で消さず、1時間の授業の流れや内容が一目でわかるように工夫する。
- ・板書の内容は精選し、書きすぎない。
- ・色チョークを有効に使い、どの生徒にもわかりやすい文字の大きさや配置を考える。
- ・学級の中には、色覚異常の生徒がいることを想定してチョークの色に配慮する。

アイデア2

ワークシート

- ・生徒の特性に応じて、2～3種類のワークシートを用意し、各自に選ばせる。

★筆者がチンパンジーの研究を続けてきたきっかけ

〔⑤段落の内容を参考に、してまとめて書こう。〕

★筆者が最近取りくんでいるテーマ

A 自力で取り組むシート

★筆者は、なぜチンパンジーの研究を続けてきたのでしょうか。

〔⑤段落に注目。「・・・から、」続けてきた。〕のを、「・・・が」ポイント。」

★筆者が最近取りくんでいるテーマは何？〔⑤段落に注目。二十三文字で書き抜きましょう。〕

「
いう疑問から、
」に強
い興味を持ったから。

B ヒント付きシート

アイデア3

授業の流れの工夫

・一時間の授業の中で「聞く」「書く」「話す」「読む」の活動を入れ、授業にメリハリをつける。

【聞く活動の工夫】

- ・生徒が一回で発問の内容を理解できるように、教室全体に聞こえる声で、ゆっくり、わかりやすいことばや表現を用いる。
- ・発問や説明は必ず生徒の方に体を向けて行う。板書をしながら、話さない。
- ・一回で多くの指示を出さない。(一時一事)
- ・聞くときは、鉛筆を置かせる。

【書く活動の工夫】

- ・生徒が書いている時間には、教師は説明をしない。
- ・「日付、ページ、単元名は必ず書く」「大事なところは色を変えて書く」など、ノートを書くうえでのルールを理解させる。
- ・机間巡視や定期的なノートの提出によって、こまめにチェックする。

【読む活動の工夫】

- ・教科書や問題文など、できるだけ多くの生徒に音読させる。
- ・それぞれの読み方のよいところをほめる。

【話す活動の工夫】

- ・TPOに応じた声の大きさの目安や話型を教室の前方に掲示する。
- ・学習の手びきとして、発表の仕方や話し合いの進め方を台本の形で示したものを配付し、発表や司会の経験を全員にもたせる。

アイデア4

学習意欲を持たせる工夫

- ・できるだけ教師の方から声をかけ、まず、ありのままの自分を受け止めてもらえるという安心感をもたせる。
- ・「ここが、わからない」「教えてほしい」と自分から言えた生徒をほめ、質問しやすい学級の雰囲気作りをする。
- ・頑張ったときや問題ができたときにはしっかりほめて、自信をつけさせる。

<取り組みを通して>

- ・文法の学習で、品詞ごとにチョークの色を変えて板書すると、生徒にはわかりやすかった。視覚的に訴える方法は効果的だと感じた。
- ・「ほめる」「励ます」ことを積み重ねていくことを通して、生徒一人一人に自信をもたせたり、学習意欲を喚起することができたと思う。

学習に集中できない生徒には？

〈学級・授業での様子〉

- ・授業中に自分の世界に入り、好きな絵を描き出す。
- ・授業に関係のない質問をする。
- ・目についたものに関心が向き、そのことについて話を始める。
- ・授業の途中でトイレに行きたがる。
- ・授業中眠ってしまう。

〈考えられる要因〉

- ・突発的な入ってきた音やものに反応し、気をとられてしまう。
- ・その時間の授業の流れの見通しが立たず落ち着かない。
- ・活動や作業の手順がわからない。また、今なにをすべきかわからない。

〈取り組みの実際〉

アイデア1

教室環境の工夫

- ・教室での座席位置は、生徒が落ち着く場所にする。
- ・音に気を取られないよう、イスの脚には（理想的には机の脚にも）テニスボールを装着する。



テニスボールを装着した椅子

- ・目に見える所に余分な刺激を与えるものがないよう、前面の掲示物は必要最小限にする。

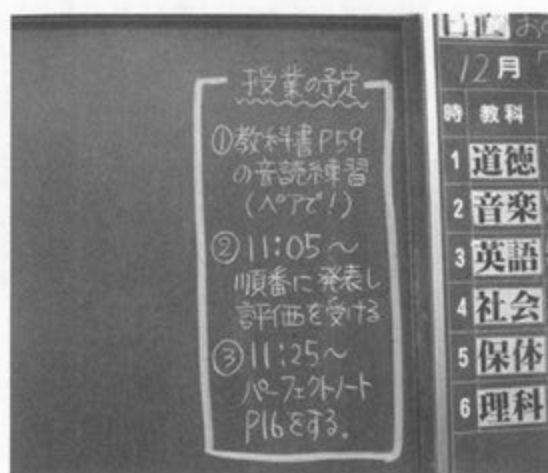


掲示物は最小限に

アイデア2

授業の工夫

- ・指示や発問は、単語の省略を避け具体的にできるだけ短く言う。
- ・注目させてから話し始める。
- ・時間内の活動の見通しを持たせるために授業の始めに、黒板に授業の流れを書いて示す。
- ・板書は見やすい色を使い、できるだけ大きく書く。
- ・視覚教材を利用する。
- ・作業的な学習を取り入れる。
- ・作業的な活動時には、机間巡視をして具体的に「～まで作ります」など個別の声かけをする。



授業の流れを黒板に書く

「大事なことを話しますよ。
こちらを向いてください。」



「～から…まで書
けましたか？」

「これが終わったら、次は
～をします。」

＜取り組みを通して＞

テニスボールを椅子の脚に装着したことによって授業中に指名された生徒の起立する時や、ちょっとした椅子の移動時に出る音がほとんどなくなった。それによって教師の説明や指示、級友の発言が雑音で聞こえにくくなることがほとんどなくなった。また、授業の初めに「今日は～をします。最初に教科書で学習して、その後は○分くらいからワークの○ページから○ページをします。」と見通しを立てることで以前より落ち着いて授業に臨めるようになった。

IV 組織的な支援を進めるために

1 「学習支援教室」の体制づくり

中学生になると、学習面での差が大きくなり、一斉授業だけでは十分な学力をつけることが難しくなってくる。また、集中することが苦手、漢字や英単語をなかなか覚えられない、聴覚だけでは情報が得にくいなどの特性から学習が遅れがちな生徒もあり、一人一人の特性に応じた指導や支援が重要になってくる。

そこで、すべての生徒に学力を保障するための取り組みとして、一昨年度より学校全体で補充学習の取り組みを始めた。

1 「学習支援教室」の開設

(1) 目的

参加する生徒一人一人の特性に応じた学習のしかたを身につけさせ、国語、数学、英語の基礎基本の定着をはかるとともに、成就感や達成感をもたせる。

(2) 実施時間

毎週月曜日の放課後1時間程度

(月曜日はノー部活デー)

(3) 実施方法

各学年ごとに、学年担当の教師で教材を作成し、指導する。

(4) 生徒の募集

ア 全生徒・保護者を対象に文書で「学習支援教室」について説明し、希望をとる。

イ 希望をもとに、国語、数学、英語の学習の状況を考慮しながら、生徒と個別に面談し参加クラスを決定する。

基礎基本クラス・・・個別指導を中心にスモールステップで学習する。

自主学習クラス・・・できるだけ自分の力で学習する。わからない時は友だち同士で教えあったり、教師に質問をする。

ウ 参加を希望していない生徒で、個別指導が必要と教師が考えている生徒とも十分に話し合う。



2 学習内容

国語・・・小学校の履修内容を含めた漢字の読み書き、文法、古典の歴史的仮名遣いの直し方などを中心とした学習。

数学・・・小学校の履修内容を含めた計算問題を中心とした学習。

英語・・・アルファベットの書き方、英単語の練習、基本的な文法の練習単語や連語、基本文型などを中心とした学習。

* 一人一人の苦手分野やどこでつまづいているかを把握したうえで対応する。

3 取り組みを通して

- ・生徒の理解に合わせたプリントをすることによって「ここがわからない」と言えるようになったり、できた喜びを味わったりした。
- ・国語、数学、英語の基礎基本の力が少しずつ定着してきている。
- ・自分にあった学習のしかたを学び、それを家庭学習に生かせるようになった生徒がいる。
- ・今後は個人カードなどを作成し、学習のあゆみを自分で確かめることで学習意欲を持続させるような工夫が必要である。

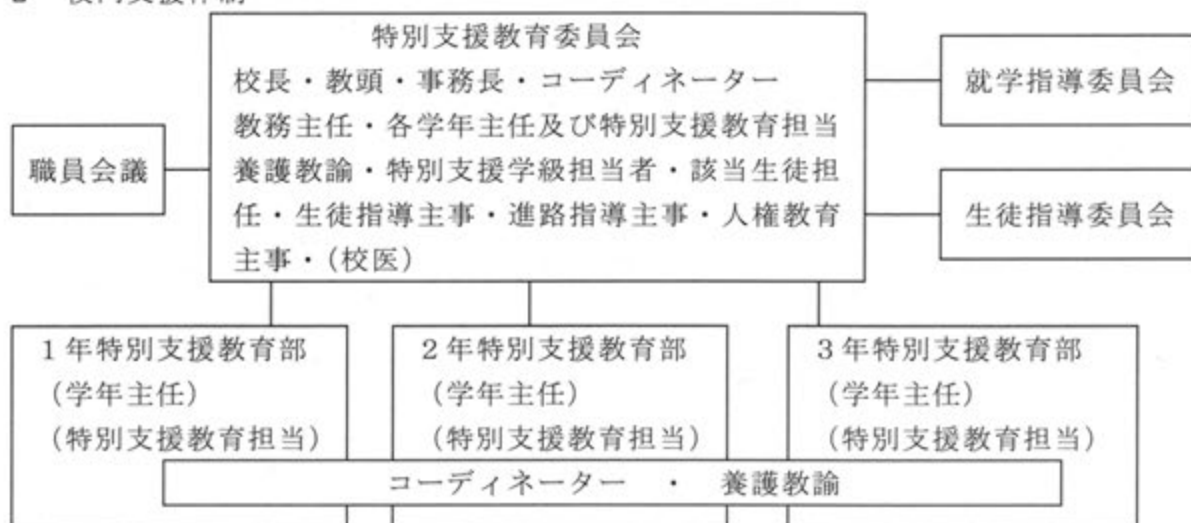
2 校内支援体制づくり

支援が必要な生徒に対して、共通理解を図るために、全教職員への校内研修の推進が重要になる。そこで本校では、特別支援教育コーディネーターが、定期的に「特別支援教育だより」を発行したり、コーディネーター研修で得た資料等を職員会議で配布、報告したりしている。また、本校のコーディネーターが県の特別支援教育巡回相談員を兼ねていることもあり、コーディネーター自身が中心となり校内研修も行った。

1 特別支援教育の年間計画

4月	小学校との引き継ぎ 保護者面談（家庭訪問など） 職員会議（校内支援体制や気になる生徒の状況についての共通理解）
5月～6月	巡回相談員による教育相談 校内就学指導委員会や校内生徒指導委員会での支援の検討など 特別支援教育校内研修
7月～8月	チェックリストによる実態把握 保護者面談（個人懇談・家庭訪問など）
9月	特別支援教育部（学年）による「個別の指導計画」の検討 学年全体の共通理解と支援体制の整備 校内生徒指導委員会で共通理解 職員会議で周知・徹底（随時）
10月～	保護者面談（随時） 「個別の指導計画」による評価と目標の修正
3月	「個別の指導計画」による評価 次年度への引き継ぎ

2 校内支援体制



3 校内研修の内容

- ・障害児教育から特別支援教育に変わった経緯
- ・通常の学級における支援と支援の必要な生徒の特性と二次障害について
- ・「個別の指導計画」、「個別の教育支援計画」について
- ・リソースルーム、通級指導教室について
- ・学習支援ボランティア、学校支援ボランティアバンク制度について
- ・特別支援教育助教員派遣事業と巡回相談員の業務について

個別の指導計画

保護者の側		生徒の側		関係者の側	
① 行動の特性を理解し、その特性に応じた指導を行う。		① 学校生活に必要とされる行動について、できる限りその特性を理解し、その特性に応じた指導を行う。		① 学校生活に必要とされる行動について、できる限りその特性を理解し、その特性に応じた指導を行う。	
② 学校生活に必要とされる行動について、できる限りその特性を理解し、その特性に応じた指導を行う。		② 学校生活に必要とされる行動について、できる限りその特性を理解し、その特性に応じた指導を行う。		② 学校生活に必要とされる行動について、できる限りその特性を理解し、その特性に応じた指導を行う。	
学年	学期	学年	学期	学年	学期
1	1	1	1	1	1
1	2	1	2	1	2
2	1	2	1	2	1
2	2	2	2	2	2
3	1	3	1	3	1
3	2	3	2	3	2
4	1	4	1	4	1
4	2	4	2	4	2
5	1	5	1	5	1
5	2	5	2	5	2
6	1	6	1	6	1
6	2	6	2	6	2

「個別の指導計画」例

4 取り組みを通して

「個別の指導計画」の作成などを通して、学年全体で生徒への対応を考え、足並みをそろえた支援をしたことで、生徒も適切な行動をとることが多くなった。また、「先生によって指示が違い、戸惑う」こともなく安心して学校生活を送っている。「担任一人による支援」から「学校全体での支援」が有効であると実感できた。

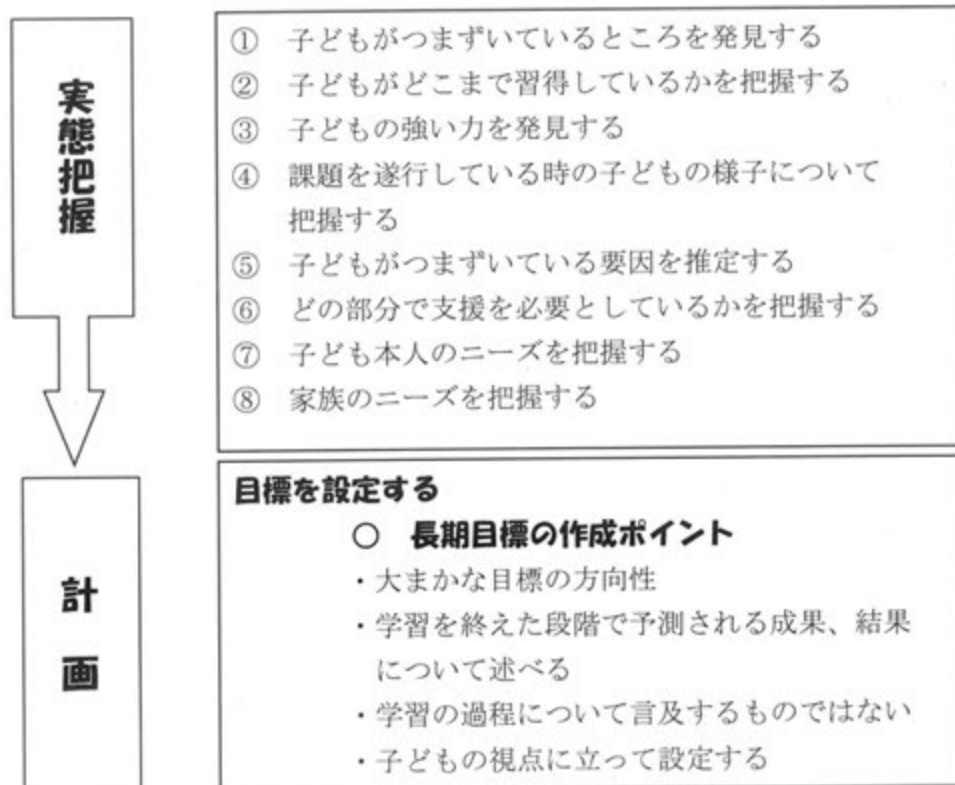
V 「個別の指導計画」にチャレンジ

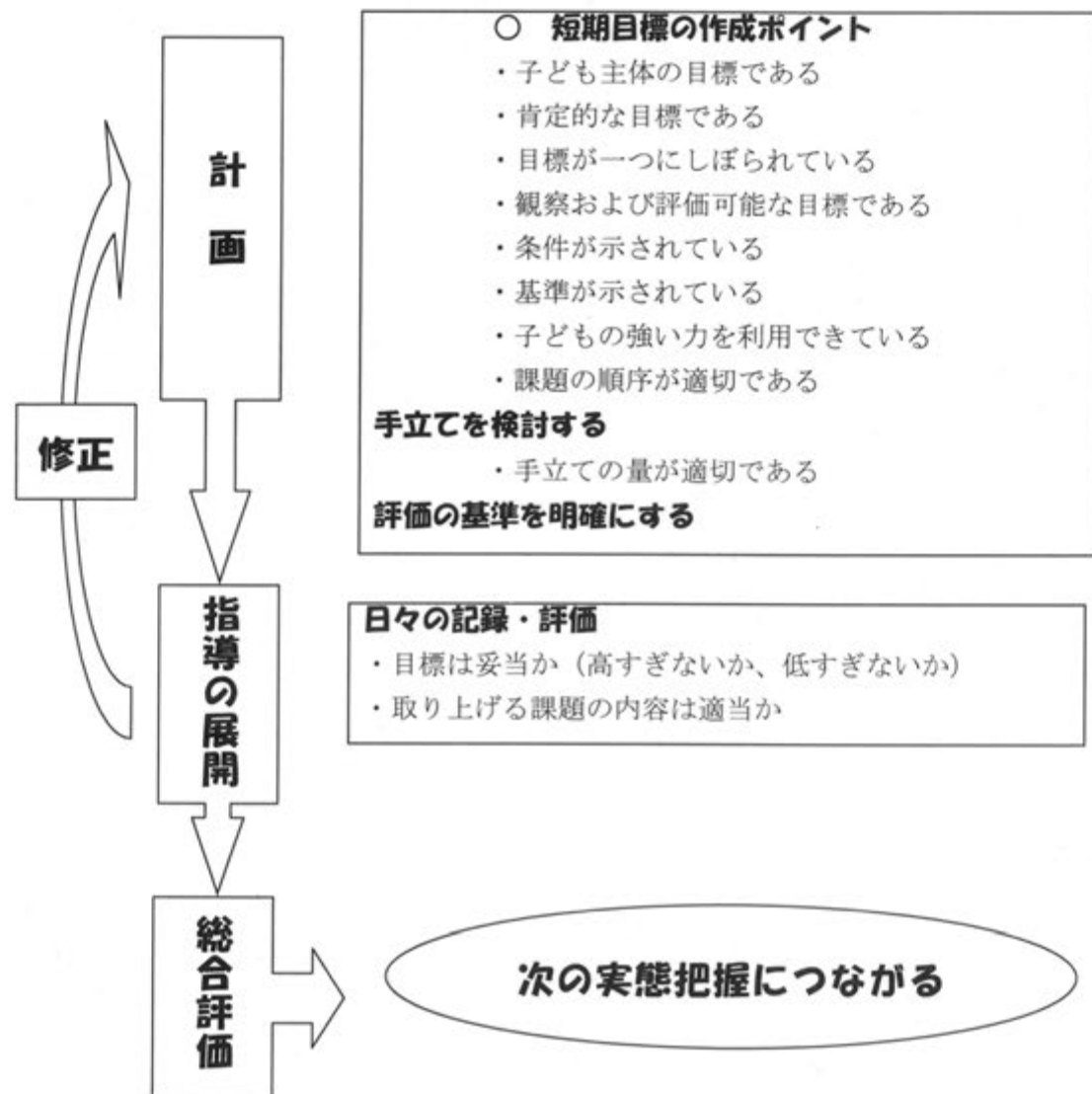
「個別の指導計画」とは、児童生徒一人一人の障害の状態に応じたきめ細かな指導が行えるよう、具体的に児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じて、指導目標や指導内容・方法を盛り込んだものである。教育課程にもとづき学校が作成するが、保護者と相談しながら作成すると、家庭での協力も得られ効果的である。

「個別の指導計画」を立てるメリット

- ・子どものどういう点について実態把握すべきか明確になる
- ・指導の方向性が明確になる。
- ・評価の視点が明確になる
- ・指導の意図することが他の人へ伝えやすくなる
- ・子ども自身が自分の学習の方向性を理解しやすくなる
- ・クラス全体への相乗効果をもたらす
- ・作成者のスキルアップにつながる

作成の流れ





「個別の指導計画」の様式例を次のページに掲載しているが、決まった様式はないので児童生徒の実態に合う様式を使用する。

<引用・参考図書>

○「特別な支援を必要とする子どもの参考資料」

H16.3 <徳島県－特別支援教育推進体制モデル事業に係る調査運営会議>

○「個別の指導計画作成ハンドブック ～LD等、学習のつまずきへのハイクオリティな支援～」 海津亜希子著 日本文化科学社

○「通常の学級担任がつくる個別の指導計画」

廣瀬由美子・佐藤克敏編著 東洋館出版社

○「高機能自閉症、ADHD、LDの支援と指導計画」

東京コーディネーター研究会編著 ジアース教育新社

保護者の願い		- 漢字がもっと書けるようになって欲しい。 - 友だちと仲良く遊ぶようになって欲しい。		記入日		H 20 年 5 月 14 日	
長期目標	学習面	習った漢字を作文の中で使える。		記入者		阿波 花子	
	行動面	好きなことを見つけ、友だちと遊ぶ。					
		子どものニーズに応じて 必要なところを記入する					
	実態 (目標設定の理由など)	前期	後期	評価	後期	評価	
学習面	- 漢字は正確に書けないが、丁寧を書く。 - 全体指導では活動しにくいこともあるが、勉強はしなければならぬという気持ちを持っている。	短期目標	1 年の漢字 80 字について間違った漢字を示された際、その部分を修正できる。(教師自作デストで 80 % 以上)	△	短期目標	2 年生の漢字 (読み仮名のみ) が入った短文を、本を見ながら 100 % 漢字になおすことができる。	△
	前半は否定的でも 後半は肯定的な文章に	手立て	修正できなかった漢字の形について言語化する方法を教える。	△	手立て	はねやとめ等、細かい部分まで正確でなくともよいことにする。	○
行動面	自分の気持ちを誤解されることがあり、つい集団から離れて一人遊びをしたり一方的に話しかけたりすることがある。	短期目標	天気の良い日は一日一回休み時間は外に出て遊ぶ。	○	短期目標	一日一回休み時間に友だちを遊びに誘う。	○
	保護者が受け入れられる ような表現を心がけること	手立て	学級活動や体育等で、遊び方を教える。	○	手立て	誘い方や断られたときの対処法を道徳等の時間に練習させる。	○

VI おわりに

今回の特別支援教育調査研究ワーキングでは、小中学校現場の先生方に協力していただき、通常の学級における授業や学級経営の中でできる環境調整や支援の方法について実践研究を行った。半年余りの実践を通して、先生方が改めて気づいたことや感じたことは、次のとおりである。

○ 学級の中でいろいろな支援をしていくときに私が心がけていたことは、学級の子ども全員が「先生が私を見てくれている」と実感できるようにすることだった。子どもたちは一人一人、自分は特別な存在だと実感したがっている。たとえある子どもの困り感に焦点をあてた支援でも、学級全体で取り組んだり、他の子にも提示したりすることが不可欠だと思う。「苦手な子はこういう方法もあるよ」と教師が提案したら、「先生は私たちみんなのことを考えて言っている」と子どもたちは思う。担任としては、子どもが持っているちょっとした苦手意識にも日頃から寄り添っていなければならない。また、支援の方法はたくさんあるけれど、特効薬的な方法があるわけでも、いつ使っても効果的な方法があるわけでもない。うまくいったりいかなかったり。いくつかの支援を組み合わせ、時と場合によって様々なアプローチを仕掛けなければならない。そのためには専門知識だけでなく、目の前の子どもの様子を見極める観察眼と臨機応変さが必要だと感じた。

○ 何よりも、最大の支援となるのは学級のなかま意識である。困っている子どもを助ける子ども、問題が起これば一緒に考える子ども、思いやりを持った子どもが増えることが、一番の支援になると思う。通常の学級で、担任一人ができる個別の支援は限られている。教師は全体への支援を工夫し、個別の支援は子どもたちの助け合いの力も借りなければならない。実践を通して感じたことは、基本となる学級経営の大切さだった。

○ 学級や教科の授業の中で、気になる生徒がいて、どう適切に支援をおこなっていけばいいのかというのが大きな課題であった。自分が受け持った学級なのだからという責任感や保護者の期待、子供たちとの関係などから気が重くなり、学級経営や教科指導に悩んでいた。しかし、特別支援教育の実践研究を進めていくうちに、細やかな配慮や工夫、教室掲示の工夫などによって、子供たちは大きく成長していくということがわかった。しかも一部の生徒のためではなく学級全体や教科指導に大変有効である。しかし、担任一人の力には限りがあり、保護者の協力や周囲のサポートがあるからこそ取り組めたと思う。

○ 必要な支援の内容はその子どもによって多種多様である。一人一人の実態をふまえ、個に応じた支援をすることが理想であろう。しかし、現実はなかなか難しかった。支援が必要な子どもの多さに比べ、自分が対応できている量の少なさに、反省する日々である。今回の研究では「個々に応じた支援にとどまらず、他の子どもにとっても有効な支援をすること」を目標に取り組んでみた。4月のできるだけ早い時期に学級全体の子どもの実態を把握し、子どもが抱えている困難さを大まかに分類してみた。そして支援を考えると一人の子どものことだけを考えるのではなく「この子にもあの子にも使える方法」を考えた。そうすることで、支援の方法に幅ができ、柔軟に対応できたよ

うに思う。また、「準備や実際の支援が簡単にできるようにすること」も目標とした。最初の準備はどうしても時間がかかったが、その後の支援の際はあまり時間がかからなかった。道具等は、一年間使うことを考えて丈夫に作るものなのか、使い捨てにした方が手間がかからないものなのかをよく考えてから作成した。

○ 他の子どもの力をうまく活用することも大切である。係の仕事、休み時間の過ごし方、学級活動などの際は、常に支援の必要な子どもを中心にして考えた。教師一人では限られているし、担任よりも周囲の友だちの方がつきあいは長くなる。友だち同士でお互いに助け合えるようなサポート体制を作ることも忘れてはならない。また、担任が替わる際にそれまでの支援の方法をきちんと引き継ぐこと、子どもの成長や周囲の環境の変化に合わせて支援の方法を見つめ直す大切さと難しさを痛感した。

○ これまで支援の必要な生徒に具体的にどのような支援や援助ができるのか、暗中模索の状況の中で取り組みを進めてきた。その中で見えてきたことは、生徒の言動が表面的にわがままで自己中心的に見えても、「その生徒にとっては、その生徒なりの理由が必ずある。」ということだ。「一体何を考えているかわからない。」と自分の物差しで決めてしまわないで、根気強く観察と実態把握を行い、「実際にどのような支援が可能か。」を1つでも発見していくことが重要だと感じた。このことは障害の有無にかかわらず、学級の生徒たちすべてに対していえることである。今年度、私の学年では「絆～人と人とのつながりを大切に～」を総合のテーマとし、エンカウンターを取り入れて人間関係づくりに取り組んできた。その中で、「一人ひとりが尊重され、温かい人間関係が築かれた学級集団」がすべての生徒を支援する基盤となると痛感した。今後さらに、具体的な支援の方法や工夫を探ると同時に、お互いを支え合い高め合う学級づくりを目指し取り組んでいきたい。

○ 通常の学級での、支援の必要な子どもへの手だてを実践しながら、試行錯誤の毎日である。色々な支援を実践しながらも、継続することの重要性を切実に感じている。また一方、しっかりこなかった支援は違う方法に切り替える柔軟さも、支援する側の大切な心構えであると思う。

○ 発達障害の特性のある子どもは、学校生活の中でいろいろな誤解を受けたり、相手の理解不足から誤った対応をされることがある。担任として、学校全体の理解と協力を得ながら、できるところから工夫や配慮をすることにより、周囲から誤った対応を受けることが少しは軽減できたと思う。仕方がないではなく、周囲の理解と適切な支援で改善されるのだという意識をもって生徒とかかわっていきたいと思う。

研究を通して、これまでの教科指導や学級経営を今一度特別支援教育の視点で見直すことから始めていくことで、多くの大切なことに改めて気づくことができた。本研究が小中学校での特別支援教育の実践に活用されることを期待している。

今後も国及び県の動向を視野に入れながら、障害の有無にかかわらずすべての子どもに役立つ手立てを考えるという視点で、さらに調査研究を継続していきたい。

徳島市特別支援教育調査研究ワーキンググループ

子どもにとってよりよい支援をつなぐために
～通常の学級でできる指導・支援事例集～

発行日：２００８年３月

発行者：徳島市教育委員会

徳島市幸町２丁目５番地

電話 ０８８－６２１－５４１２

編集者：特別支援教育ワーキンググループ委員
